

# レクリエーション指導者に関する研究

— 性別・年代別にみた指導者の意識とその実態について —

福岡教育大学 秋吉嘉範

## I. はじめに

レクリエーション指導者は、レクリエーション運動を推進する上で、重要な役割を果している。

さて、レクリエーション指導者は、レジャー活動を指導し、企画し、管理する人と考えると、現場で実際活動を指導する人、行政官、研究者などに分けることができる。ところが、我が国の現状では、一部の指導者を除き、ほとんどが篤志（ボランティア）指導者である。

今後、レクリエーション運動を発展させるためには、指導者養成を質量共に高める必要がある。とくに、量的には地域関係のレクリエーション指導者の養成、質的にはレクリエーション指導者の専門職化が緊急の要請となっている。このように考えると、レクリエーション指導者に関する研究は、極めて重要な問題であるといえる。

これまでのレクリエーション指導者に関する文献・レポートは、片岡暁夫の「レクリエーション・リーダーの任務に関する原理的考察」（レクリエーション研究第7号）、雑誌レクリエーション連載「レクリエーション専門職への道(1)～(8)」（1971年1月号～8月号）など数編がある。いずれの文献・レポートもすぐれたものであるが、どちらかといえば、レクリエーション指導者を、個人的次元で捉えているようである。そこで、この研究は視点を変えて、レクリエーション指導者を集団で捉え、論じたものである。

## II. 研究の目的

この研究は、レクリエーション指導者の意識とその実態を性別・年代別に明らかにし、今後のレ

クリエーション指導者のあり方について、検討しようとしたものである。

## III. 対象および時期・方法

1. 対象は、日本レクリエーション指導者クラブ所属メンバー全員536名（昭和46年9月末現在）および北九州市レクリエーション協会養成のレクリエーション指導者562名である。

日本レクリエーション指導者クラブ全員に調査票を郵送し、回答を依頼、回収したのが341名、回収率63.6%である。一方、北九州市レクリエーション協会認定の指導者は、職場ごとに調査票を持参し、562名に回答を依頼した。回収したのが281名、回答率50.0%である。

2. 調査の時期は、表1. 性別・年代別集計  
昭和46年9月から

10月までである。

3. 方法は質問紙法による。集計は性別を基礎に、年代別に分け、実数を百分率で現わしている。

表1は性別・年代別の集計である。

性別 年代別	男子	女子
20代	173	69
30代	170	21
40代以上	156	33
計	499	123

## IV. 結果と考察

### 1. レクリエーション指導者の実態につて

#### (I) 学 歴

男子の20代、30代は高校卒が70%を占

めているが、40代以上は、高校率が44%と少なくなり、大学率33%、中学卒22%と、それぞれ増加している。女子をみると、20代は高校卒が半数以上を占め、中学卒も25%と、他の年代より多い。ところが、30代、40代以上では大学卒が半数以上を占め、中学・高校卒は1/3程度である。

男女とも年代が高くなるほど、大学卒が多い。また、中学卒は男子の場合、年代が高くなるほど多い。女子の場合は逆に、年代が高くなるほど中学卒が少なくなっている。

### (2) 結婚

ここでは既婚か未婚かを調べたものである。男子をみると、20代は半数が未婚、30代、40代以上になるとほとんどが既婚である。女子は、20代のほとんどが未婚、30代でも43%が未婚である。40代以上では、未婚が24%と少ない。このことは男子に比べて女子の方に未婚が多く、しかも、年代が高くなってもかなり未婚がいることがわかる。

### (3) 職業

男子をみると、20代は労務的職業、事務的職業が多い。30代では労務的職業、事務的職業とともに、専門・管理的職業が多くなっている。40代以上では、労務的職業が少なくなり、事務的職業、専門・管理的職業が多くなっている。女子をみると、20代は男子同様、労務的職業、事務的職業が多い。30代は事務的職業、専門・管理的職業、40代以上は専門・管理的職業が多い。男女共通していえるのは、農林漁業、販売・サービスの職業がほとんどいないことである。また、年代が高くなるほど専門・管理的職業が多くなっている。

### (4) 勤務形態

男子をみると、20代、30代では、交替制勤務が%を占めているが、40代以上になると14%と少なくなっている。女子は、20代に交替制勤務が41%いるが、30代、40代以上になると、ほとんどが普通勤務である。

### (5) 職場での地位や役割

男子をみると、20代は一般社員が83%であるが、30代で50%、40代以上になると一般社員は、25%と少なくなっている。つまり、年代が高くなると、係長や部長・課長が多くなっている。女子は20代、30代とも、一般社員がほとんどである。役付は30代に14%、40代以上に18%みられる。女子の特長は、主婦27%、自営9%が目立つことである。

### (6) 職場以外での地位や役割

男子は20代で36%、30代で54%、40代以上となると72%と職場以外での地位や役割を持っている。女子についても、ほぼ同様に、20代28%、30代52%、40代以上76%となっている。つまり、男女とも年代が高くなるほど、職場以外に仕事を持ち、そのなかで何らかの役割を果たしていることがわかる。その内容は、子ども会、体育指導委員、ボーイスカウト、青少年関係クラブ、野外活動、フォークダンスなどの指導者である。

### (7) 職場内のクラブやグループ所属

男子は20代57%、30代55%、40代以上になると、やや少なくなり45%である。女子は男子と異なり、20代が38%と最も少なく、30代48%、40代以上42%となっている。

クラブやグループの内容は、男子は各年代とも、球技スポーツが圧倒的、ついで、登山、ボーリング、釣り、スキー、合唱などである。女子は各年代とも、男子同様、球技スポーツ、ついで、フォークダンスなどである。

### (8) 職場外のクラブやグループ所属

男子の所属者は、20代43%、30代54%、40代以上は62%と、年代が高くなるほど多くなっている。女子は、20代31%、30代、40代以上は倍増して、それぞれ70%になっている。

職場外のクラブやグループの内容は、男女各年代ともレクリエーション・リーダーグループ、レクリエーション協会、ユースホステル、フォーク

ダンス、球技スポーツなどが多い。

職場内と職場外での所属を比較すると、男女とも20代では、職場内のクラブやグループ所属者が多いが、男子は40代以上、女子は30代、40代以上になると、職場外でのクラブやグループ所属者が多くなっている。

#### (9) 生きがい

男子をみると、20代88%、30代、40代以上は96%が生きがいを感じている。女子は、20代78%、30代100%、40代以上94%が生きがいを感じている。男女とも20代より30代、40代以上の方が、生きがいを感じている。

生きがいの内容をみると、男子は20代で、仕事41%、ついで、友情・恋愛30%、レクリエーション指導30%、趣味・ならいごと29%、30代では、レクリエーション指導48%、ついで、子どもを育てる47%、仕事40%、40代以上では、レクリエーション指導が70%と断然多く、ついで、仕事40%、子どもを育てる36%である。女子の場合、20代は友情・恋愛52%、趣味・習いごと52%、ついで、仕事26%、レクリエーション指導24%の順である。30代では、レクリエーション指導が38%でトップ、ついで、仕事33%、子どもを育てる27%、趣味・習いごと24%、友情・恋愛24%の順である。40代以上では、レクリエーション指導90%、仕事45%、趣味・習いごと32%、子どもを育てる29%となっている。男女共通しているものは、20代では、友情・恋愛、趣味・習いごと、仕事などが多い。30代、40代以上になると、レクリエーション指導が断然トップ、ついで、子どもを育てる、仕事などが多い。

#### (10) 仕事のやりがい

男子をみると、20代82%、30代40代以上で86%が仕事のやりがいがあるといっている。女子は20代67%、30代91%、40代以上73%となっている。女子の20代に仕事のやりがいがないと答えた人がかなりいることがわかる。

(11) レクリエーションという言葉聞いて連想するもの

レクリエーションといっても、個人によって受けとり方が違う。そこで、レクリエーションをどう捉えているか調べたものである。男子をみると、20代、30代で「遊び」がトップ、40代以上は「楽しい」がトップ、ついで、20代、30代の「余暇善用」、40代以上は、「人間関係」である。女子は、男子同様各年代とも、「楽しい」がトップ、ついで20代の「スポーツ」、「和」の順である。このほか、男子で目立つのは、健康、人間性回復、気分転換、創造性、野外活動、グループなどである。男女共通にいえるのは、「余暇に人間性回復をはかる、健康で創造的な、楽しい遊び」と捉えている。

## 2. レクリエーション指導について

### (1) レクリエーション指導を始めた動機

レクリエーション指導を始めた動機は、図Iに示すとおりである。図Iで男子をみると、各年代とも推薦されて、好きだからが多い。ついで30代、40代以上では、「好きだから」が多いが、20代では少ない。つまり、20代は「頼まれてしかたなく」という、消極的な動機が30%と目立つ。現在、女子のレクリエーション指導者が少ない。その上、若い年代で動機が消極的というのは問題である。今後、もっと積極性のある指導者の養成が望まれる。

### (2) レクリエーション指導を学んだところ

どこでレクリエーション指導を学んだかを調べたところ、男女各年代とも講習会が最も多い。他は40代以上の男女に、独学が目立つ程度である。現在、我が国では、日本レクリエーション協会主催の各種講習会や、地域協会主催の講習会などが、数多く開催されている。しかし、恒常的な学園や専門課程の学部学科は少ないので、早期開設が望まれる。今一つは、大学や高校などの学校教育のなかで、レクリエーション教育をとりあげるべきである。大学では、まず教員養成系大学で、小学校

図1. レクリエーション指導を始めた動機

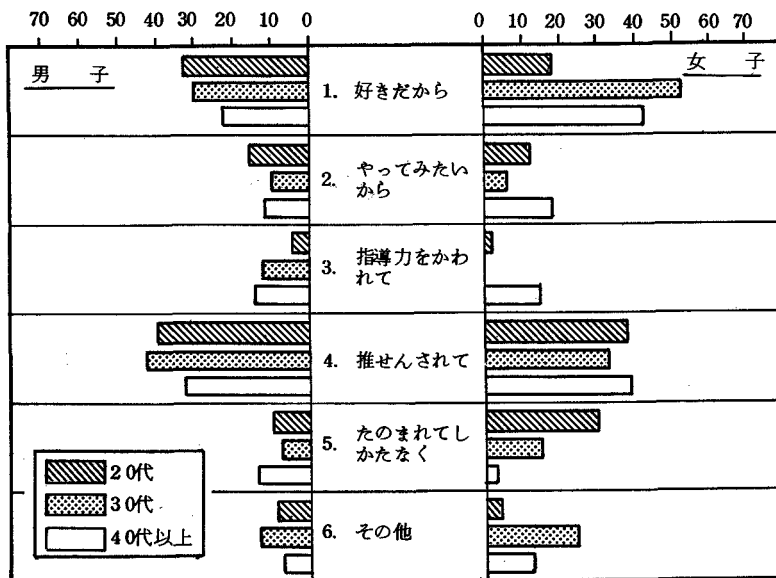


図2. 指導している対象

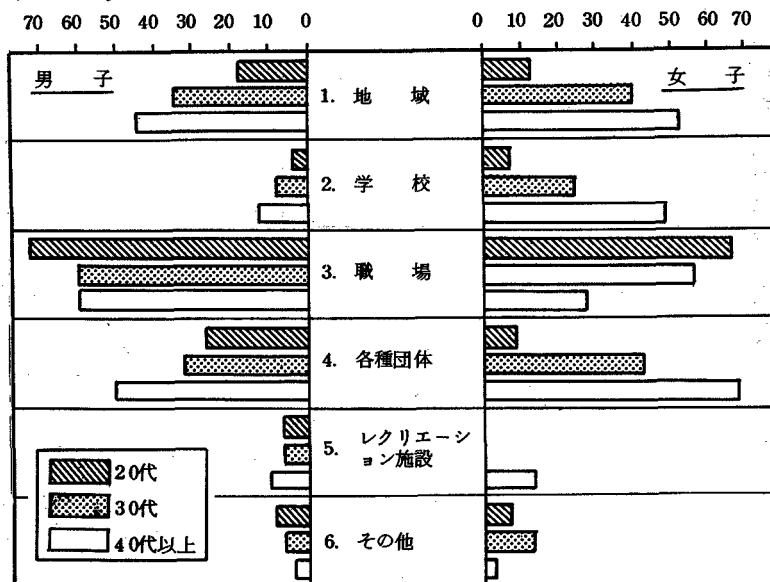


図3. 指導能力に対する満足度

	男子			女子		
	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)
20代	4.6	79.2	16.2		71.1	28.9
30代	5.3	83.5	11.2	48	85.7	9.5
40代以上	9.0	81.4	9.6	30.3	63.6	6.1

(1) 満足している (2) 満足していない (3) どちらともいえない

中学校，高等学校では，現在のカリキュラムを再検討して，その位置づけを明確にすべきである。

(3) 指導の対象としている相手

指導の対象にしている相手は，図2に示すとおりである。図2によると，男女とも20代は職場が多い。30代になると，職場を中心に，各種団体，地域などが多くなっている。40代以上は，男女とも各種団体・職場（男子はとくに目立つ）・学校などが多い。すなはち，

20代は，職場中心，

30代は，職場中心に各種団体と地域，40代以上は，各種団体，地域が中心になり，職場となっている。20代，30代も地域に進出して欲しい。

(4) 指導能力に対する満足度

自己の指導能力に対する満足度は，図3に示すとおりである。図3によると，男子は各年代とも，

自己の指導能力に満足していないものが、80%前後いる。満足しているのは、40代以上の9%が目立つ程度である。女子は、20代で満足しているものは、まったくいない。ところが、30代では5%、40代以上では、30%も満足している。しかし、男女各年代共通していえることは、自己の指導能力に満足していないものが、極めて多いことである。今後、優れたレクリエーション指導者になるためには、指導能力を一層高めねばならないことはいうまでもない。

(5) 得意とする指導内容

さて、自己の指導能力に不満足であるというのが多い。ところで、得意とする指導内容の結果をみよう。得意とする指導内容(種目)を持ってい

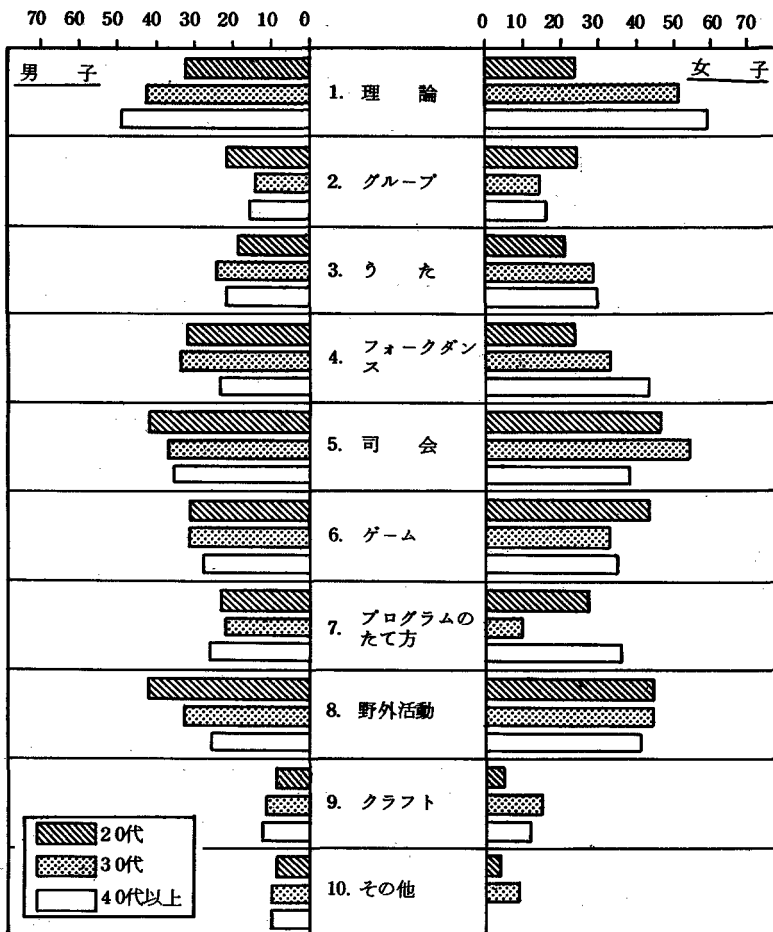
るのは、男子で、20代、30代の71%、40代以上になると、81%と多くなっている。女子は、20代59%、30代86%、40代以上は、実に100%となっている。得意な指導種目を、1種目も持たないものが、男子の20代、30代で29%、女子の20代、30代で40%もいる。現在の日本レクリエーション協会、または、地域レクリエーション協会の指導者資格認定が甘いという声があるが、その裏づけとなる資料である。

ところで、得意とする種目をみると、男女各年代ともゲームがトップ、ついで、男子は、野外活動、うた、女子は、フォークダンス、うたである。男子の特長は、球技スポーツ、女子は、フォークダンス、民踊といえるだろう。なお、レクリエーション理論や司会の仕方、グループづくりを得意とするものは少ない。レクリエーションの指導は、うたって、おどって、ゲームをする。いわゆる、<レクリエーション三種の神器>だけにとどまらずに、理論的な背景を十分持って欲しい。レクリエーション指導が単なる技術指導に陥入ることのないような研修が望まれる。

レクリエーション理論や司会の仕方、グループづくりを得意とするものは少ない。レクリエーションの指導は、うたって、おどって、ゲームをする。いわゆる、<レクリエーション三種の神器>だけにとどまらずに、理論的な背景を十分持って欲しい。レクリエーション指導が単なる技術指導に陥入ることのないような研修が望まれる。

(6) レクリエーション指導についての学習意欲  
レクリエーション指導について、もっと勉強したいか、この程度でよいか調べたものである。もっと、勉強したいというのは、男子が各年代とも97%、女子は20代86%、30代、40代以上では95%にも達し

図4. 勉強したい内容



ている。勉強しなくてよいというものは、ほとんどない。すなわち、前に述べたレクリエーション指導に対する満足度では、ほとんどのものが不満であると回答しており、学習に対する意欲があるのは、当然として受け取ってよいと思われる。

勉強したい内容を示したのが、図4である。図4によると、司会の仕方、野外活動が43%でトップ。ついで、レク理論、フォークダンス、ゲームがそれぞれ31%である。30代、40代以上では、レク理論が43%程度でトップ。ついで、司会の仕方37%、野外活動30%、フォークダンス28%である。女子は20代で、司会の仕方46%、ついで、ゲーム、野外活動43%。30代もトップは、司会の仕方55%、ついで、レク理論55%、野外活動45%。40代以上は、レク理論が58%でトップ、ついで、フォークダンス45%、司会の仕方39%、ゲーム、プログラムのたて方36%である。男女共通しているのは、レク理論、ゲーム、野外活動、司会の仕方を学びたいといっていることである。とくに、年代が高くなるほど、レク理論を学びたいといっている。というのは、レクリエーション指導の経験がふえるほど、レクリエーション理論の重要さや、必要性を感じるのだろう。

#### (7) 指導者としての資質

指導者としての資質を示したのが、図5である。図5によると、男女ともに多いのは、健康、協同性、ユーモア、活気、判断力、社会性などである。独創性、社会性、判断力、自信などは、男女とも年代が高くなるほど、多くなっている。とくに、40代以上の男女の社会性が目立つ。一方、指導者としての資質が少ないのは、男女とも学識、ことばの駆使力、ぬきんでたいという欲求、知能、組織力、体格などである。

ことばの駆使力、組織力などは、指導者の資質として重要なものであると思われるので、もっと身につけて欲しい。ことばの駆使力は、司会の仕方を学習したいというものに多かったことから関連して、実際面で必要であるといえる。

#### (8) 家族や職場の理解度

指導者としての活動に対する家族や職場の理解度をみると、男子では、各年代とも、指導者としての活動に好意的であるというものが多い。一方、女子をみると、20代は好意的が45%とやや少ないが、30代、40代以上になると、それぞれ81%と極めて多い。指導者としての活動に批判的なのは、男女とも5%以下で非常に少ない。また、無関心は男子では、年代が高くなるほど少なくなり、むしろ、諦めているが多くなっている。このような状況から、レクリエーション指導者としての活動を、家族や職場はかなり理解しているとみてよい。現在、レクリエーション指導者の多くは、篤志指導者であり、実際活動で家族や職場の理解を得ることは、家庭生活を送る上で、重要なことである。

#### (9) レクリエーション指導と本職との関係

現在のレクリエーション指導者は、一部の専門職を除き、ほとんどが、篤志指導者である。

そこで、レクリエーション指導と本職との関係を示したのが、図6である。図6によると、男子は各年代とも、大いにさしつかえるのは5~7%、かなりさしつかえるのは20~22%である。ところが、たいしてさしつかえないのは、各年代とも、60%程度である。女子は各年代とも、大いにさしつかえるものはいない。かなりさしつかえるは20代に15%みられるが、30代、40代以上になると5~6%である。たいしてさしつかえないのは、20代62%、30代81%、40代以上73%となっている。

すなわち、男女とも%以上のものが、本職との関係でたいしてさしつかえないといっている。この点、本職とレクリエーション指導との関係を上手にこなしているといえる。

#### (10) レクリエーション指導者の専門性

レクリエーション指導者の専門性について調べたのが、図7である。図7によると、男子は専門職になった方がよいというものが20代25%、30代、40代以上は、それぞれ31%である。

図5. レクリエーション指導者としての資質

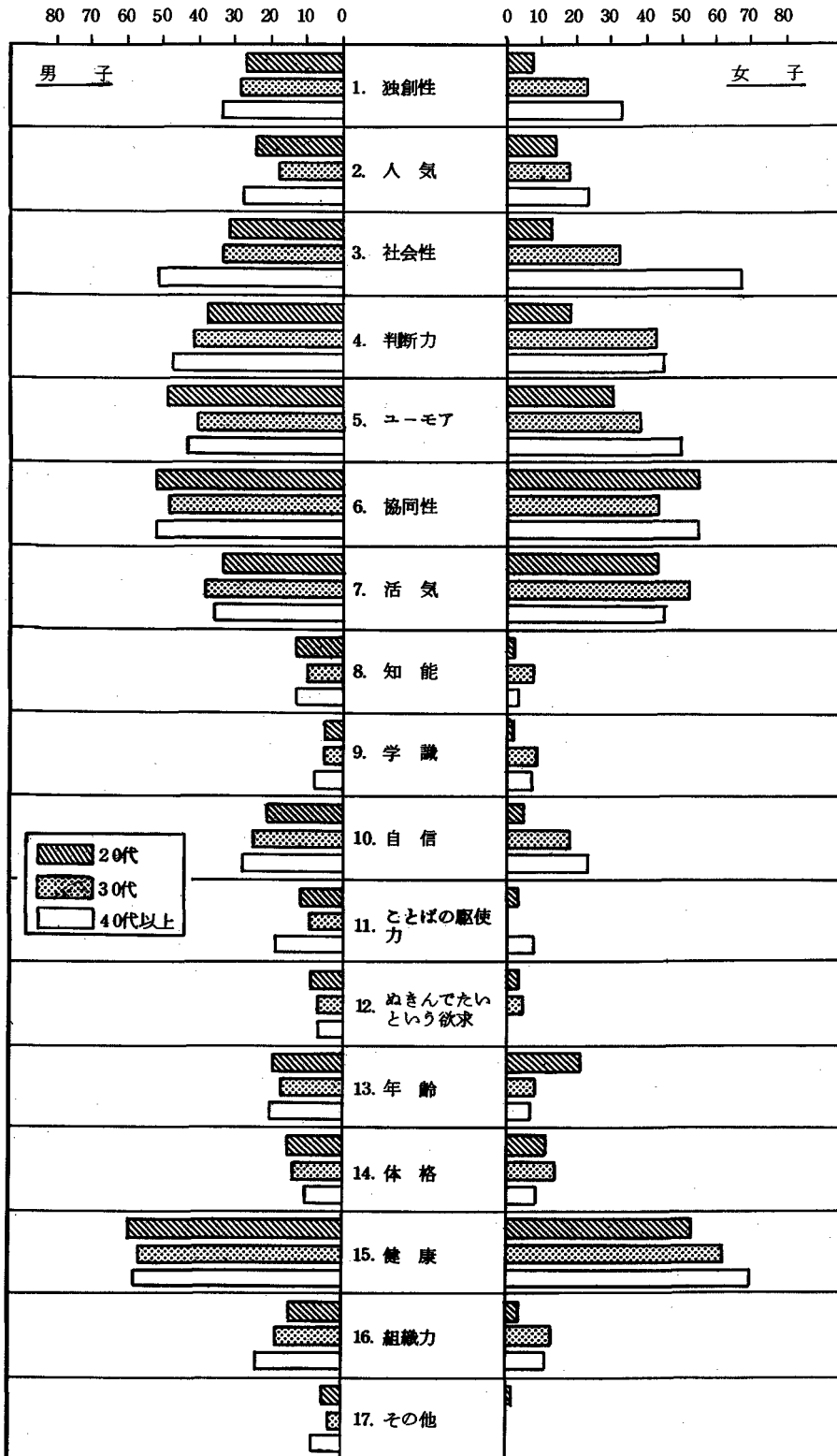


図6. レクリエーション指導と本職との関係

男 子				女 子			
(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)
5.8	20.2	59.6	12.1	20代	16.5	64.4	19.1
5.3	20.6	58.8	14.1	30代	4.8	80.9	14.3
	9.3	22.4	60.9	9.6	40代以上	16.1	83.9

(1) おおいにさしつかえる (2) かなりさしつかえる (3) たいしてさしつかえない (4) どちらともいえない

図7. レクリエーション指導者の専門性

男 子			女 子		
(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)
24.9	28.3	46.8	23.7	30.0	46.3
30.6	31.8	37.6	43.9	10.4	45.7
30.8	26.6	37.6	27.3	24.2	48.5

(1) 専門職になったがよい (2) 篤志指導でよい (3) どちらも必要

篤志指導でよいといったのは、20代28%、30代32%、40代以上は24%である。また、どちらも必要というものは、20代40%、30代43%、40代以上は49%と多くなっている。

現在、レクリエーション指導者の専門職化が問題になっているが、男女各年代とも専門職になったがよいと回答したものが30%程度、篤志指導者でよいと回答したものは、25~30%、どちらも必要であるというものは35~50%である。このことから篤志指導者だけでよいという意見よりも、専門職化したがよいという考え方や、そのどちらも必要であるという傾向が強いといえる。

(1) レクリエーション指導者としての悩み

レクリエーション指導者としての悩みをみると、悩みがたくさんあるのは男子で、20代49%、30代41%、40代以上51%とかなり多い。悩みがすこしあるは各年代とも42~52%とやはり多い。すなわち、男子の各年代とも、ほとんど悩みがあるといっている。一方、女子は悩みがたくさんあるが、20代44%、30代72%、40代以上36%である。すなわち、女子も男子

同様、各年代にわたり、悩みがあるといっているものが多い。

悩みの内容をみると、男子は20代で、参加者が少ない、交替制勤務で困る、施設・用具が少ないなど、30代では、施設・用具が少ない、指導者としての立場が確立していないなど、40代以上では、予算が少ない、指導者としての立場が確立していない。施設・用具が少ない。レクリエーション・リーダーが少ないなどがそれぞれ多い。女子をみると、20代では、参加者が少ない、話術に自信がない、指導法がわからない。レクリエーション・リーダーが少ないなどである。

30代では、指導者としての立場が確立していない、参加者が少ない、レクリエーション・リーダーが少ないなどである。

40代以上では、レクリエーション・リーダーが少ない、施設・用具が少ないなどが、それぞれ多い。

男女、各年代を通じて多いのは、レクリエーション・リーダーが少ない、施設・用具が少ない、指導者としての立場が確立していない。参加者が



少ない、などがあげられる。

年代が高いほど、少なくなっているのは、男子で参加者が少ない、交替制勤務、女子では、参加者が少ない、指導法がわからない。話術に自信がないなどである。これらは、年代が低いほど、指導の経験が少ないといえるので、今後、指導経験を重ね、実力をつけることによって、悩みのいくつかは解消されるであろう。交替制勤務は、製造業などにとりあげられているが、制度としてあるからには、このなかでレクリエーション指導者として、どのように過ごすか、また、職場のなかで、どのように指導するか、指導者個人は勿論のこと、職場としても検討して欲しい。それとともに、職場管理者層の理解を求める努力がより一層必要である。

女子をみると、レクリエーション・リーダーが少ない。施設・用具が少ないなどがあげられる。これらの悩みは、指導者個人だけで解決できるものではなく、行政的な面から、あるいは職場などの、管理者層への積極的な働きかけが必要である。

#### (12) レクリエーションに対する要望・意見

レクリエーションに対する要望・意見をみると、男子では20代64%、30代75%、40代以上83%と年代が高くなるほど要望や意見が多い。女子は、20代57%、30代86%、40代以上76%とやはり年代の高い方が要望・意見が多い。

要望・意見の内容を、国・県・市および職場や学校、レクリエーション協会、指導者自身の4つに分けてみると、

国・県・市に対する要望・意見は、①施設・用具の増加、充実 ②予算の援助、増加 ③専門職の制度化 ④レクリエーションの必要性の理解、重視 ⑤施設・用具の解放、などがあげられる。施設・用具の増加、充実は、当然の要望として出されたものと思われる。現在、商業レジャー施設が、つぎつぎに建設されている。しかし、利用には多額の金のかかる施設が多く、もっと安く利用できる公共的な施設の増設が望まれる。また、

学校や職場施設の解放が是非必要である。

職場や学校に対する要望・意見は、①職場全員のレクリエーションの理解と認識 ②施設・用具の解放 ③上司の理解 ④レクリエーション活動の積極化 ⑤レクリエーション教育 ⑥専門職としての立場の確立、などをあげている。職場では、まだレクリエーションに対する認識が低いことから、職場の管理者層はもとより、従業員全員に対するレクリエーション教育をする必要がある。

#### (13) レクリエーション協会に対する要望・意見

レクリエーション協会に対する要望・意見は、①指導内容の充実 ②一般市民へのレクリエーションPR ③講習会の開催、④地域レクリエーション振興 ⑤レクリエーション指導者の養成、などがあげられる。指導内容の充実は、レクリエーションの技術的な指導だけに終わらずに、理論面の充実が問題にされている。レクリエーション協会は、市民へのレクリエーション振興策を真剣に考え、普及・発展のための努力が、今一層望まれる。

自分自身に対する要望・意見は、①積極的な自己研修をすること ②指導力の向上 ③積極的なレクリエーション活動 ④講習会、研修会などへの積極的参加 ⑤理論と実践の両立化などがあげられている。もっと勉強を、という意見が多いのは、指導力の向上、レポーターを広げるなど、勉強意欲が強いことがわかる。ところが、指導者自身暇がほしいという要望・意見は注目される。レクリエーション指導に明け暮れて、自分自身のレクリエーション活動が不十分であっては「紺屋の白袴」になる恐れがあることを忘れてはならない。

## V. 要約

以上をまとめると、つぎのようなことがいえる。

(1) レクリエーション指導を始めた動機は、男女各年代とも、推せんされてが最も多く、ついで好きだからが多い。年代別では、30代、40代以上は、好きだから、20代では推せんされてが多い。

(2) レクリエーション指導を学んだところは、男女各年代とも講習会が最も多い。年代別で目立つのは、男女40代以上の独学である。

(3) 指導の対象にしている相手は、男女とも20代は職場、30代になると職場、各種団体、40代以上は、各種団体、職場（とくに男子）、学校などが多い。

(4) 指導能力に対する満足度をみると、男女各年代とも、自己の指導能力に満足していないのが極めて多い。満足しているのは、女子の40代以上にいくらかみられる程度である。

(5) 得意とする指導内容をみると、得意とする指導種目を持っているのは、20代で、60～70%程度が、30代で、70～80%、40代以上になると、実に80～100%になっている。年代別では、男女とも年代が高くなるほど、得意とする指導種目をもつ人が多い。

得意とする指導種目は、男女各年代とも、ゲームが第一位、ついで、男子で野外活動、うた、球技スポーツ、女子は、フォークダンス、民踊などである。なお、レクリエーション理論や司会の仕方、グループづくりなどは少ない。

(6) 指導者としての資質をみると、男女各年代とも多いのは、健康、協同性、ユーモア、活気、判断力、社会性などである。男女とも年代が高くなるほど多いのは、独創性、社会性、判断力、自信など、とくに、40代以上の男女に社会性が目立つ。

(7) 家族や職場の理解度をみると、女子の20代を除けば、各年代の男女とも家族や職場の理解度は極めて高い。無関心は、男子で年代が高くなるほど少なくなり、むしろ、諦めているが多くなっている。

(8) レクリエーション指導と本職との関係をみると、男女各年代とも、たいしてさしつかえない人が過半数である。おおいにさしつかえるのは、男子で5～7%、女子はいない。

(9) レクリエーション指導者の専門性についてみると、専門職になったがよいというのは、男子

で25～30%程度、女子は20代、40代以上が20%台、30代は43%とやや多い。篤志指導者でよいというのは、男女各年代とも、30%前後（女子の30代は9%）である。残りは、どちらも必要であるといっている。

(10) レクリエーション指導者としての悩みをみると、男女各年代とも%以上が、悩みをもっている。悩みの内容は、20代で参加者が少ない。話術に自信がない。指導法がわからない。交替制勤務で困るなど、30代では施設・用具が少ない。指導者としての立場が確立していない。40代以上では、レクリエーション・リーダーが少ない。予算が少ない。施設・用具が少ない。などが多い。

(11) レクリエーションに対する要望・意見をみると、男女各年代とも過半数が要望・意見を持っている。とくに、年代が高くなるほど要望・意見が多い。

要望・意見の内容をみると、国・県・市に対するものとして、施設・設備の増加、充実、レクリエーションの必要性の理解、などである。職場や学校に対するものとしては、職場全員のレクリエーションの理解と認識・施設・設備の解放、上司の理解などである。

レクリエーション協会に対するものとしては、指導内容の充実、一般市民へのレクリエーションPR、レクリエーション指導者の養成などである。

自分自身に対するものとしては、積極的な自己研修、指導力の向上、理論と実践の両立化などがある。

## VI. 今後の問題

1. 現在のレクリエーション指導者は、篤志指導者が中心である。ところが、今後レクリエーション運動を推進して行くには、名実共にレクリエーション専門指導者が必要である。今回の調査をみても、単なる篤志指導者でなく、専門職化を望んでいる人が多い。このことから考えると、早急にレクリエーション専門指導者養成にとりかかるべきである。それと共に、レクリエーション専門

職として定着できる職場の開拓をしなければならない。

2. この調査をして感じたことは、男性にくらべて女性のレクリエーション指導者が少ないことである。現在職場関係で、女性指導者がかなり養成されているようであるが、まだ少ないといえる。専門職として考えても女性の職業としては適職ではないだろうか、今後、女性指導者の養成も合わせて望みたい。

3. レクリエーション指導者が指導対象にしているのは、職場が最も多い。このことは現在の指導者養成状況から推察できる。ところが、職場といっても大企業中心ではないかという批判がある。同じ職場でも中小企業に目を向けて欲しい。中小企業は多くの問題をかかえているのは事実であるが、だからといって取り組みをおろそかにしてはならない。むしろ、中小企業へ篤志指導者を送りこむことも考えねばならない。大企業中心でなく、中小企業や地域、学校、各種団体の指導者養成をもっとはかる必要がある。

4. レクリエーション指導を始めた動機は、推せんされてや、たのまれてしかたなく、という人が多い。すなわち、積極的な動機で始めた指導者

よりも、消極的動機の指導者が多いのは問題がある。現在、とくに職場レクリエーション指導者の養成状況をみると、必ずしも積極的動機のものばかりではない。なかには、職制上しかたなくとか、押しつけられて、という人もかなりいるのは事実である。このような状況のなかでは、すぐれた指導者は生れにくいのではないだろうか。今後の問題として考えて欲しい。

5. 得意とする指導内容を持っている指導者がいることである。たしかに、多少の遠慮もあるだろうが、指導者としては問題である。レクリエーション指導者であるからには、得意とする指導内容(種目)を持つのは当然である。指導者は自己研修を忘れてはならない。

なお、レクリエーション理論を得意とする人が少ない。理論と実技は両立しなければならない。実技中心でなく、理論面の補強をしなければならない。

なお、この研究にあたり、日本レクリエーション指導者クラブ会員、および北九州市レクリエーション協会所属レクリエーション指導者の皆さんの調査協力に深く感謝する。